

新
修

舞鶴市史編さんだより

第3号

発行日／令和7年
7月1日

最近の地質調査から ～舞鶴の大地の成り立ちを考える（炭田編）～

舞鶴市市史編さん委員会 蘭田 哲平
文化遺産部会委員

今年4月に文化遺産部会の地形・地質グループのメンバーで3日間にわたる地質調査を実施し、市内各所を巡りました。今回はその中から「舞鶴炭田」について紹介します。舞鶴市内にはかつて炭鉱がいくつもあり、それらを総称して「舞鶴炭田」と呼んでいました。

筑豊や石狩などの国内の石炭層のほとんどが約5000万年前（新生代始新世）より新しい時代のものであるのに対して、舞鶴の石炭層の年代はとても古く、今から約2億5千万年～2億3千万年前ごろ（中生代三畳紀）の地上に繁茂していた植物が、地層の中で長い長い年月を経て変化したものです。今回の調査では、志高・八戸地・松尾の炭鉱跡を訪ね、坑口跡および周辺に露出する地層を探索しました。

舞鶴炭田は閉山してから少なくとも65年以上が経過していますが、八戸地では坑口跡が残存しており、周囲には石炭層が露出する崖や植物化石を含むズリ山（捨て石の集積場）も確認できました。



◆ 崖面に露出した八戸地の石炭層

松尾炭鉱は石炭層の厚さや質などの条件が舞鶴炭田の中で最も良かったようですが、現在では場所もよく分からなくなっていました。今回、古い地図を頼りに踏査した結果、志楽川沿いにズリ山を発見し、そこから植物化石を見つけることができました。

新生代の石炭は燃える時に多くの煙が出ますが、舞鶴炭田のように古い時代の石炭は、より長い年月をかけて石炭化が進んで純度が高いため、ほとんど煙を出さない“無煙炭”に変化しています。この無煙炭は軍艦の燃料として利用された時代があり、じつは海軍とも深いつながりがありました。



◆ 松尾炭鉱周辺採集の植物化石（大きさ約5cm）



“神崎と由良の海運”

舞鶴市市史編さん委員会
委員 吉野 健一

電車や車での人や物を運ぶことが当たり前の現代からすると、想像もつきにくいことですが、明治時代に電車や車による陸上交通が発達するまでは、大量の物資の輸送は主に海運や水運といった、水上交通が担っていました。その中でも、由良川の河口に位置した神崎村と由良村（ともに加佐郡）は、江戸時代から

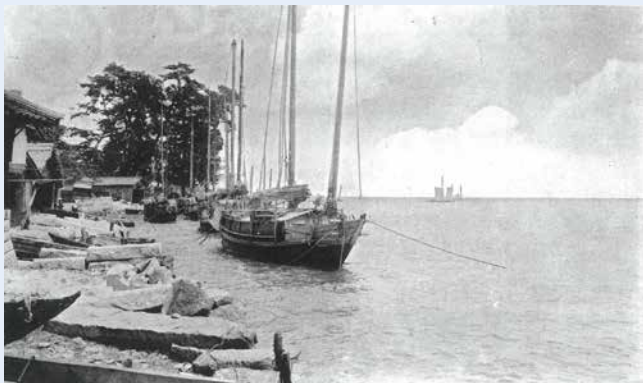


写真1 由良川河口の由良湊に停泊する船
(明治時代～大正時代)

明治時代頃にかけて多くの船乗りを輩出し、廻船に乗った船頭たちは、日本海沿岸の物資を主に大阪方面に運ぶ、運送の担い手として活躍しました。

いつ頃から神崎や由良の人々が海運と関わっていたのかは資料が少なく分かりませんが、由良川の河口に位置し、海と川との結節点に当たるため、古くから船は身近な存在だったことでしょう。中世の様子は、山椒大夫説話などから推測するしかありませんが、江戸時代になるとその様子がもう少し詳しく分かってきます。

江戸時代中頃の安永6年(1777)には、新潟県出雲崎に「丹後国神崎」より、100石から300石ほどの廻船が入港した記録が残されており、この頃にはすでに能登半島を越えて、新潟近辺までを交易範囲とする神崎船が活躍していたことが知られます。また、同じく神崎村の船頭の家に残された祈祷札などからは、神崎の船頭たちが、酒田・鶴岡(山形県)、新潟(新潟県)、境港(鳥取県)、松江(島根県)、下関(山口県)、神戸(兵庫県)、琴平(香川県)など、日本海や瀬戸内海方面にも進出していたことが分かります。ここから、神崎の船頭が、北陸、東北、北海道などから海産物や米などを積んで、下関を通り大阪まで運ぶ、いわゆる「北前船」に乗り込んでいたことが分かります。さらに、幕末の嘉永7年(1854)には、神崎村の船頭が小浜から170両で船一艘を購入した記録も残り、船頭として富を蓄積し、自分自身の船を持つまで成長した船頭の姿を伝えます。

丹後の廻船は、その後明治時代頃まで活躍が続きますが、関係する資料はまだ調査中のものが多く、今後も丹後の廻船をめぐる新しい発見が期待されます。



写真2 丹後周辺の航路(下が若狭湾)
田辺や由良への航路が見える
(『大日本籌海全図』明治元年)

舞鶴の記憶 [3]

今年は、第二次世界大戦の終戦から80年となります。

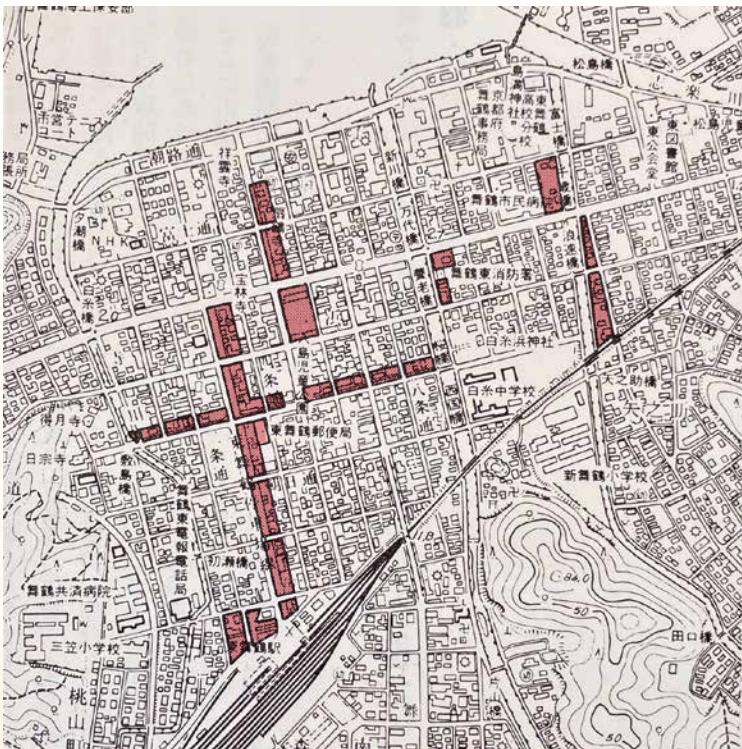
昭和20年4月、舞鶴市では空襲による延焼を防ぐため、家屋の強制疎開が実施されました。これにより、東地区の東舞鶴駅前から大門通までの三条通に面した東側の商店や住宅が立ち退かされて道路となったのです。

疎開対象は西地区や中地区にも及び、合計19か所で1200戸の家屋が立退きを余儀なくされ、総面積7万100坪(231,330㎡)が空き地になりました。

三条通の道幅が広いわけ ～建物強制疎開～



◆現在の三条通（大門通の北側は元の道幅）



◆東地区の家屋疎開位置図（舞鶴市史通史編（下）より）

疎開計画は市の都市計画に合わせて立案され、舞鶴市と東・西両警察署による実施本部が設置されました。立退料は市が支出し、引越しや家屋の取壊しは警察や海軍、警防団が主導し町内会も協力しました。立退対象家屋には夜間に強制疎開の紙が貼られ、わずか5日間で立ち退かねばならず、家屋はロープを掛けて引き倒されました。

現在、私たちが見慣れている道幅の広い三条通、五条通、敷島通などが整備される背景には、疎開対象となった方々の大変なご苦労がありました。

(Y H)

【西地区の疎開対象地】

西舞鶴駅前～現大手通(国道27号線南北)の大手橋～広小路通間の西側、広小路通(国道27号線・175号線)新橋～相生橋間の北側、竹屋通～三の丸通間の南側、新大橋西側～笑原神社間の南側など

【中地区の疎開対象地】

中舞鶴駅前(現国道27号中舞鶴交差点西側一帯)など

取組状況

市史編さんを具体的に進めていくため、令和6年度に設置した5つの部会がそれぞれ活動を展開しています。

考古・古代・中世部会や近世部会では市史の章立てやテーマ及び執筆者の調整、近代部会では旧軍港関係の資料確認・調査、現代部会では引揚港関係の資料調査や目録作成、文化遺産部会では分野・ジャンル分けを含む計画づくりや地形・地質の現地調査などを実施しています。

また、市民による市史編さんボランティア活動においては、古文書等の写真撮影や目録作成などを実施しています。

市史編さんに関わる委員31名、ボランティア16名を中心に、市民にわかりやすく手にとってもらえるような市史を令和14年度までに13巻刊行する、という目標に向けて、関係団体とも連携を図りながら計画的に取り組んでいます。

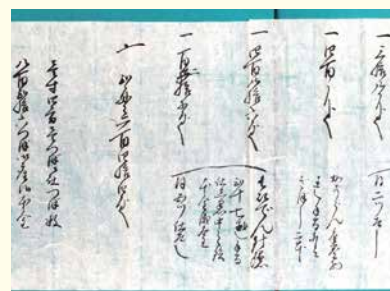


《市史見開きイメージ》

市史編さん日誌

令和7年3月～5月（主な活動）

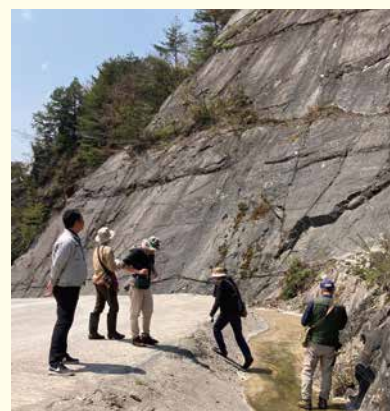
3月1日	新修・舞鶴市史編さんだより第2号発行
3月4～27日	金村家文書調査・写真撮影
3月8・9日	木船家文書調査（京都府立大学）
3月10・11日	近代部会旧軍港グループ資料調査 （坂根嘉弘委員ほか委員1名）
3月12～14日	現代部会引揚港グループ資料調査 （黒沢文貴委員ほか委員3名）
3月24日	綾部市資料館から借用の田辺藩裁判資料返却
3月25日	市史編さん委員会第2回現代部会開催 （上杉和央部会長ほか委員4名）
3月28日	市民から風景写真パネル50点寄贈
3月29日	市史編さん委員会第3回近世部会開催 （廣瀬邦彦部会長ほか委員4名）
4月2～23日	金村家文書調査・写真撮影
4月3・4日	現代部会引揚港グループ資料調査 （黒沢文貴委員ほか委員3名）
4月11・12日	金村家文書調査（京都府立大学）
4月14～16日	文化遺産部会地形・地質グループ現地調査 （藺田哲平委員ほか委員2名、市内各所）
4月22日	文化遺産部会絵図・地図グループ会議 （上杉和央委員ほか委員2名）
4月25日	市史編さん委員会第2回文化遺産部会開催 （吉野健一部会長ほか委員2名）
5月13～28日	金村家文書調査・目録作成



◆金村家の古文書



◆田辺藩裁判資料



◆採石場での調査（岡田由里）

[発行] 舞鶴市
生涯学習部文化振興課（市史編さん係）

〒624-0853 舞鶴市字南田辺1番地 舞鶴西総合会館2階
TEL：0773-68-9556 FAX：0773-77-1823
Eメール：history@city.maizuru.lg.jp